

環境社会計画専攻らしさを活かした大学生生活

～ 課外活動を通じて学び、成長したこと～

谷口 浩，肥田真梨子
環境計画学科
環境社会計画専攻4回生
(コメント 専攻教員 金谷 健)

私の大学生生活の右往左往（谷口 浩）

1. 大学で初めにしたこと

1-1 大学に入ってから目的が無い状態

この環境社会計画専攻に明確なビジョンを持って入学する学生は非常に少ないと思います。何となく「環境に配慮した社会をデザインする」という非常に曖昧な言葉に惹かれて来た学生が大半だと思います。私も間違いなくそのうちの1人でした。これといった目的が無く入ってしまったのが本音です。入学してからはしばらく雲を掴むような手ごたえで居ました。そのせいか授業もあまり覚えていません。他の学部や大学に行った学生よりも目的意識が無いのだろうと焦りも感じていました。「何かをしないといけない」そう思ったときに、二つの出来事がありました。

1-2 技術士環境部門の受験

ある昼下がりの授業で、うとうとして時間が過ぎていったときのことでした。先生が環境関係で一番難しいと言われる「技術士」の試験について話し出しました。難しいだけに価値もあるし、就職にも強いと言うことでした。でも学生中に合格するのは難しいということも同時に聞きました。特に目的意識の無い私は、何となく4ヵ年計画で受験してみようと思って締め切りが迫る中ドタバタで申し込んで見ました。

1-3 サークルが主催するセミナーへの参加

企業などの組織が取り決めに従って環境に配慮した仕組みを作って活動（そして客観的に評価）するための規格である「ISO14001」と言うもののセミナーを学生サークルが主催すると言うのを聞きました。「何となく仕組みが作りたい」「企業が環境配慮しないと環境問題は解決しない」という漠然たる私の意識に反応してこちらも受けてみました。

2. カリキュラムの現状

一方で当専攻のカリキュラムですが、社会における環境問題の変遷と現状、その解決のための環境技術や環境政策の手法や理論などを体系的に学んできました。

特に行政や企業、住民など利害が複雑に絡み合った各主体を学生が演じて社会のルールについて議論する「合意形成技法」や、環境NPOや環境省など

現場の最前線の方の声が聞ける「政策形成・施設演習」などは本当に刺激的なものでした。また「環境フィールドワーク」では、実際にリアルタイムで取り組まれているバイオディーゼルの普及運動などを視察し、課題を調査、解決策を提案するという非常に難しくもやりがいのある内容でした。

カリキュラムは、水環境・廃棄物・法律・大気・心理学・経済学など非常に幅の広い範囲を扱っていました。全てを知らないといけないというのも納得いきますし、その中から自分のやりたいことが見つければそれで良いと思いました。しかし、大学のカリキュラムに従っていても、特に「コレになれる」「こんな資格が取れる」なんてことはありませんでした。先生側も、「幅広い進路の中から、自分で探さない」というスタンスでした。

3. 自分で決めた課外活動だから

3-1 カリキュラムと課外活動のつながり

個別には充実していたカリキュラムですが、実践するという点に関してまで網羅されているものではありませんでした。それこそ何か自分のやりたい事（やりたいと思わなくても）を一つでも見つけ、その世界を学外で実際に体験する必要があります。そこで、私が取り組んだのは「技術士環境部門」の受験と「ISO14001」の実践でした。とても高尚な目的意識があったわけではありませんが、目標が無いからこそ何かを何でもいいから始める必要があると考えたのです。ですから今振り返ってもやりたいたことをやってきたという自負はありません。

3-2 とにかく環境活動の「実績」を残したかった

私は、特にISO14001の活動に注目し、上述のセミナーに参加し環境系サークル（EMO：滋賀県立大学環境マネジメント事務所）に入りました。そのサークルの活動は、主に県立大学生協のISO14001活動を協同で実践することと、その経験を活かして学外地域の企業にISO14001取得の支援・コンサルティングをすること、そして分かりにくいISO14001の内容と実践の仕方を学生や地域の企業の人に教えるセミナーの主催、の3つです。

私は、その中でも地域の企業にISOの仕組み作りの指導に力を入れてきました。しかし初めは怖くて仕方ありませんでした。学生が企業の指導をする

ということの難しさと、失敗したときに責任が取れるのかという大きな不安があったからです。小さな会社ではなく、数百人規模の中堅企業が相手です。また学生が授業ではなく、学生だけの主体的な活動として指導をすると言うのは全国に例のないことでした。

初めは怖気付くことや失敗ばかりでしたが、どうしてもこの企業の環境活動を推進させて環境ばかりでなく本業の部分でも新しい風を吹かせたいという思いから、徹夜での作業、担当者との折衝、従業員の教育などを行ってきました。

特に難しかったのは、既存の組織の風土や仕組みに対してどのようにISOで決められたルールをそこに適用するかということでした。何かをすると言うルールは簡単に作れます。しかし、それを実際に滞りなくやることは容易ではありません。難しい用語を使う場面もあり、理解が付いていかないことが当たり前の世界です。そして仕組みの内容が分かっていてもやる意義が分からない、意義が分かっているても行動しないという現実がそこにはありました。これらに対してしっかり原因を考えて、仕組みの改善や従業員の意識を向上させる必要がありました。

目的は、学生による指導が無くても自立的かつ継続的に自分たちの作ったルールを守り、そのルール自体を向上させるようになってもらうことでした。苦労が絶えませんでした。無事ISO14001の認証を取得し本当に全国初の事例を作ることが出来ました。

この活動が珍しいのは、コンサルティング会社をあえて使わずに社会に無知な学生の思いつくアイデアや雰囲気重視し、そして双方に学ぶ場を与えた会社と、学生との協働の活動だったからです。

3-3 実績はそのままでいけない

結局それでめでたしとしては面白くありません。その活動を各メディアにアピールをして雑誌や新聞に掲載されました。また、「組織内の環境マネジメント(管理)」だけでなく、サークルと関わる企業同士をサークルが節となつて有機的に結びつける「地域の環境マネジメント」が出来ないか、という今後のプランを含めて専門誌に寄稿したりもしました。

やりっぱなしではなく、事例を発信して社会の環境運動の機運を高め、また次のチャンスの足掛けとなるように自分たちも継続的改善を目指しました。この活動は大学内だけでは出来ませんし、また環境意識の高い組織(登場人物)が多いから出来たことという意味では、他の大学では絶対に出来ない、滋賀県という場だからこそ出来たことです。

カリキュラムだけでは絶対にこの専攻の醍醐味は味わえません。座学を通じて興味を持ち、学外のフィールドへ自主的に出て足掻いて見るという体験を

する。その体験を通じて養った視点で、座学の大切さを再確認する。このサイクルがあって初めてこの専攻が目指す人材が輩出されるのではないかと思います。

4. 大学生生活で得られたもの

以上の活動は自分の力でやってきた部分は本当に少ないです。しかし何も無い所からチャンスに飛びついて食らい付くことで、本当に良い機会に恵まれたと思います。専門知識が身につけて、交渉することを学んで、仕組みづくりの難しさを痛感して…。いろいろなことが学べましたし、身に付いたと思いますが、何よりも目的が無かった所からでもしっかりやれることがあるんだという体験が一番でした。

取り上げるのが遅れましたが、技術士の環境部門の1次試験も受験1年目で合格することが出来ました。

クラスで誰も取り組まなかった中で、まずやってみようと言う思いと行動があったため、正直運によるものですが合格することが出来ました。

その合格をきっかけに様々な専門家の方とも人脈が出来たので、本当に最初の一步は大事だと思っています。そういった機会がまた自分を成長させていくと思うので、これからもチャンスを逃さず、また始めたことは最後までやり遂げるようにしたいと思います。

環境問題も何も無い所から問題を新たに提起して、解決策も何も無い所から見つけてまた作っていかなくては行けません。そういった意味では、人が学ぶ姿勢にも似た所があると思います。

5. 進路とこれから

進路は、上記の活動もあって物流機器関連企業の環境対応の部署に付くことになりました。仕事内容は、今までの経験をそのまま行かせるISO14001の仕組みづくりとその運用を任される予定です。海外に売り上げの半分がある企業で、その海外の支社や現地法人の認証取得を執り行います。今までは学生の立場でしたが、次は企業で当事者としてやってみたく、また様々な業界を結ぶ物流企業だからこそ出来ることがあると考えています。

環境なら公務員という道もありますが、前述のとおり企業を変えることが環境問題の解決を前進させるという思いから、とにかく現場から初めてみよう、一番現場に近いところを選びました。

当専攻、当大学、この滋賀県で学んだことは本当に大きなものでした。まず企業で、現場でしっかり社会を具体的に見る力と行動できる力を身に付けて、将来的に環境問題の解決に、さらに広く見た社会に対して少しでも貢献できるような人物になればと考えています。

1400日の大学生生活（肥田 真梨子）

1. 大学生生活での2つの目標

1-1 環境問題について学ぶ。

「大学卒業後には、社会に役立つ人になりたい。今後、大きな問題になる事は何か？その問題に対し社会に広く通用する手法を学びたい」と考える中で環境問題に興味を持ち、環境社会計画専攻で学ぶ事を決めました。

1-2 大学生生活をおもいっきり充実させる。

「大学生生活の1400日をどう過ごすかで、大きな差がでます。さあ、あなたはどうしますか？」1年生前期の授業で、T先生がおっしゃった言葉です。大学生は、授業・サークル・遊び・バイト等を自由に選択できる恵まれた身分だと思います。高校ではクラブ活動をしていなかった事もあり、様々な事に挑戦しようと3つの団体に所属しました。

2. 大学生生活で学び、得た物

2-1 現場で学んだ多面的な視点

まず、授業を通じて学んだ事を述べます。環境社会計画専攻では、現場で学べるユニークな授業が多かったと思います。特に印象に残っている授業は「政策形成・施設演習」「イベント計画演習」「合意形成技法」です。授業内容は、環境省の方から環境政策のお話を伺う、愛・地球博のドーム内で環境問題の啓発イベントを行う、環境税導入に関するロールプレイングで市民・行政・利害関係者に分かれて議論する等です。

このような授業は他大学に例は少なく、内容も充実していたと思います。これらの授業で共通して学んだ事は「環境問題の複雑さ」つまり「問題を解決するためには、先ず現場で現状を知り、関わる全てのもののメリット・デメリット等を多面的に考える視点が必要」という事です。例えば環境問題の意識を高める為に単に普及イベントを行えば良い、環境政策を充実させる為に政府から援助金をもらえば良い等、偏った視点だけではうまく行かない事を学びました。

2-2 失敗から学んだ軸を決める大切さ

次に、サークル活動を通じて学んだ事を述べます。私が所属している3つの団体は EMO(環境系サークル) ESS部(英語系部活) 女子ラクロスサークルです。

3つをかけた事は容易な事ではなく、活動時間が重なる事が多々ありました。そのような時は「今回はEMOを優先したから次回はESSを優先させよう」といった具合に参加しており、全ての活動が中途半端になってしまうという失敗を経験しました。

ある時、先輩から「全部は出来ない」と助言を頂きました。それからは自分の軸を考えて活動に参加するようにしました。私の軸とは、環境、人との

つながり、適度な運動です。こうする事で、それぞれを両立させながら大きな成果を得る事が出来ました。

2-3 チームの力で得た成果 環境大臣賞

私の一番の軸である「環境」(EMOでの活動)を通じて学んだ事、得た成果について述べます。

EMOとは、ISO14001(組織の環境負荷や環境影響等を管理する為の国際的なルール)に沿った活動を大学生協等で実践しているサークルです。具体的には、生協職員と共に学内ごみ分別促進キャンペーンの実施、環境活動全体を見直す監査、生協で得た活動ノウハウを地元企業や団体で実践等、様々な活動をしています。

中でも印象に残っている事は、3年生の時に出場した全国大学生環境活動コンテスト2006です。環境活動に携わる全国の学生が活動内容を発表し、一定の評価基準の下で勝敗が決まるというものです。

前年度は予選敗退という事もあり、発表内容や方法をサークル丸となって試行錯誤し、練習しました。その結果、わかりやすい発表方法と活動内容が評価され、57団体中1位になり環境大臣賞を受賞する事が出来ました。しばらく実感が湧きませんでした。目標を一つにしたチームの力は大きかったと思います。

このような貴重な経験をさせて頂けたのも、今までサークル活動を作ってきた方々の努力なくしては有りえない事なので、本当に感謝しています。

下の写真は、2006.1.14に、当時の滋賀県知事(写真中央)に環境大臣賞受賞の報告を滋賀県庁で行った時に撮ったものです。



2-4 様々な経験より

次に残りの軸である「人とのつながり」「適度な運動」(ESS・女子ラクロスサークルでの活動)を通じて得た事について述べます。

(1)「伝えたい」気持ちの大切さ

まず、ESSについて述べます。毎日昼休みに英語のレッスンを展開し、他にも英語でディスカッションや暗唱大会等を行っているクラブです。私は渉外として、主に外部の人と行うイベント(留学生との交流会や他大学の人とのディスカッション等)を担当

当していました。

中でも印象に残っているのは留学生との交流会です。ほとんど日本語がわからない20人程の留学生に手巻き寿司の作り方を英語で説明しなければならず、必死で片言の英語とジェスチャーで伝えようとしました。思うように単語が出てこなくて困っていると、留学生側から英単語を言って頂き、皆が納得するという不思議な状況を体験し、何とか伝える気持ちさえあれば伝わるという事を学びました。

(2)コミュニケーション能力

次に、ラクロスについて述べます。試合に出るような強いチームではなく、週二回の練習や夏合宿、OBとの交流試合や学祭（湖風祭）に出店する等楽しく活動をしていました。ラクロスの練習をする事で、日ごろのストレスを発散する事が出来、私にとっては非常に適度な運動になっていました。

中でも印象に残っている事は、OGとの交流会です。歴代キャプテンにお会いして昔の事や進路のお話をして頂くなど、人とのつながりを増やすことが出来ました。又、学祭では、暴風雨の中でメンバーと共に一生懸命客引きをする等、忘れられない経験をする事も出来ました。

下の写真は、ラクロスメンバーで撮った集合写真です。



3つの団体での活動を通じ、様々な国や年代の方とつながる事ができ、1年生の時に比べるとコミュニケーション能力を少し向上させる事が出来たと思います。

本当にあっという間に4年が過ぎてしまいました。今後社会に出てからも、今まで共に過ごしてきた大切な仲間とのつながりや、乗り越えてきた事を糧にして、頑張っていきたいと思います。

3. 今後の進路

就職先は環境計測機器メーカーから内定を頂き、統合マネジメント業務（環境・品質・労働安全衛生のルール統合）に関わる部署で働かせて頂く予定です。

環境社会計画専攻やEMOなどで学び、得たものが活かせる進路ではないかと考え、とても嬉しく思っ

ています。今まで学んだ事を一つでも多く活かし、成長できればと思います。

具体的には、仕事内容には環境の経験を生かして、更に成長していきたいと思います。又、これからは海外の方と関わる機会も少なくないと思いますので「伝える気持ち」を忘れず、英語を学びながら言葉の壁を乗り越えられればと思います。

仕事だけではなく、会社のクラブ活動等でも適度な運動を続け、又、多くの人と関わる中でコミュニケーション能力を向上させながら、たくさんの事を学びたいと思っています。

そして、大学入学当初の目標である「少しでも世の中に貢献出来る人」になれるように頑張ります。

谷口君、肥田さんの手記を読んで（金谷 健）

環境社会計画専攻では、「環境と調和した社会経済システムの知識とそれに必要な方法論を習得して、環境政策や環境計画を立案・評価・改善できる指導的役割を担う人材を養成すること」が教育目的であり、そのために、多くの講義や演習科目が用意されている。

ある学生から言われたことだが、「学生サイドからみた当専攻の利点」は、幅広いカリキュラムがあるので、興味のある分野に出会えるチャンスが多い。

1年生から専門科目の授業をとる事ができる等、自由に授業が組み立てられるので、課外活動に打ち込む時間を、自分次第で作れる。という2点とのことである。

谷口君、肥田さんの手記を読むと、二人とも、当専攻のこうした「利点」を十分に活かして、課外活動、具体的にはEMOという環境系サ・クル活動等を通じて、大学生活を充実したものとされたことが、よくわかる。

卒業後、谷口君も肥田さんも、環境マネジメントに関わる仕事をされるとのことである。これは、内定先の企業に、本人の人柄や専攻での勉強だけでなく、EMOという環境系サ・クル活動等での実績も高く評価されたためと思われる。

二人の手記を読まれた高校生の皆さん、本学の先輩の皆さん。君たちも是非、上記の当専攻の利点である「多くのチャンスがある」「自由に大学生活が送れる」という事を活かして、当専攻の勉強+こうした環境系サ・クル活動等に参加して、環境問題について実践的に学び、充実した大学生活を過ごしてください。